

機関番号：34310

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530316

研究課題名(和文) 企業の社会的責任に関する経営史的研究

研究課題名(英文) Management historic study on corporate social responsibility

研究代表者

末永 國紀 (SUENAGA KUNITOSHI)

同志社大学・経済学部・教授

研究者番号：60065860

研究成果の概要(和文)：近江商人松居久左衛門家の蓄積と理念(同志社大学『経済学論叢』61巻3号査読無 2010年 pp.1-38)：松居久左衛門家は、江戸後期の近江商人を代表する商家である。この論文では、松居久左衛門家の、江戸期から明治期にいたる150年間の松居家の純資産蓄積の過程を明らかにした。その最盛期は、受継いだ資産を10倍に増加させて、松居家に隆盛をもたらした三代目松居遊見の代であった。遊見は、自分のみの富裕を望んだのではなく、商機を郷里の人々と共有しようとした。その考え方は、彼の信仰する仏教の教えに基づくものであった。この遊見の考え方は、自家に富をもたらしただけでなく、商人を目指す多くの後輩を育てることに結果し、地域社会へ貢献するものとなった。

近江商人野田六左衛門家の系譜と蓄積過程(同志社大学『経済学論叢』62巻4号 査読無 2011年 pp.1-58)：近江商人野田六左衛門家は、1753年に酒造業とよろず卸し小売商を北関東の板鼻で開店した。四代目は放蕩のため当主の座を追われた。五代目以後は、分家を設けて経営陣を強化し、業績は回復した。また、従業員にも利益の一部を賞与として与えることによって、長期勤続の忠良な奉公人に恵まれた。経営陣の強化と良質な従業員という二つの経営要素があいまって、近代につづく野田六左衛門家の経営を支えたのである。

研究成果の概要(英文)：The family of Rokuzaemon Noda- an Ohmi merchant- started brewing and wholesale-and-retailing business in Itahana, northern Kanto area, in 1753. The fourth-generation master was expelled from the family business for his debauchery, but the masters of the following generations repaired the business performance by setting a cadet family to strengthen the management team.. Also, a part of profit was given to the long-service employees ,which assured their loyalty and extended services. The enhanced management team and the decent employees have been the two key factors for the Noda family's success in business till modern times.

The family of Kyuzaemon Matsui was a well-known Ohmi merchant family in the late Edo period. In this paper, I clarified the Matsui family's asset accumulation process over 150 years from the Edo to the Meiji period, and it's peak period was in Yuken Matsui, the family's third generation, who decupled the inherited family wealth and brought prosperity to his family. Yuken did not only pursue the family's prosperity but also shared business chances with the local people. His such attitude, based on teachings of Buddhism, brought wealth to his family and made contribution to the local society by successfully producing many new merchants.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：経済史

科研費の分科・細目：経済学・経済史

キーワード：CSR 社会的責任 経営理念 家訓 近江商人

1. 研究開始当初の背景

経済学では通常、企業は自らの利潤の極大化を図れば事足りるとされている。しかし、現代の企業は、利益の追求にとどまらず、地球環境を保全しなければならないという持続可能な成長の達成が求められている。これは非常に難しい課題であり、それを解決するための方策として最近では、社会的責任経営（CSR）が注目を集めている。実際、株式市場においてはCSRを意識した経営を行っている企業を中心に投資する、社会的責任投資（SRI）が着実に増加している。

CSRは、利益の一部を社会貢献事業に寄付するという伝統的なフィランソピーとは大きく異なるものである。消費者における環境保全意識などが高まるなか、社会的に有用とみなされる活動に従事していなければ、どんなに優れた商品やサービスを提供したとしても、そういった企業の生き残りは困難である。その一方で、企業の側からみた場合、CSRを積極的に採り入れれば、将来の危機を回避したり、新しい市場を創出したりすることができるという利点がある。

経営にかかわる基本理念のない企業というのはいない。「人はパンのみに生きるにあらず」と聖書が説くように、誰も生活していくためにのみ働いているわけではないからである。自らの仕事は何らかのかたちで社会的な意義を持っていると考えられるからこそ、企業への帰属意識も高まる。企業の場合も、同じである。たとえ営利の追求を目的にしたとしても、その利益に社会的な正

当性がなければ、たちまち内部告発が避けられない。この企業経営における社会的正当性の重要性は、数々の企業不祥事が近年、多発していることからみても明白いうことができる。これからの企業のあるべき姿をもとめるとき、参考になるのは、近江商人の経営理念の、「売り手よし」、「買い手よし」、「世間よし」という「三方よし」の考え方である。とくに「世間よし」は、商取引には社会認識が必要なことを強調している点で、先見性を有している。さかのぼれば鎌倉時代、下つては現代の老舗企業にまでおよぶ長い活動の歴史を持つ近江商人の経営と理念を具体的にたどることは、CSR（企業の社会的責任）という横文字で表現されるようになった近年の企業と社会的責任の関係に歴史的光を照射できるであろうということが、研究開始当初の背景にあった。

2. 研究の目的

CSRというのは、21世紀において突如浮上した経営面での課題ではない。江戸時代から営利活動における社会的責任に気付いていたのが老舗商人の代表ともいえる近江商人である。彼らの「三方よし」という考え方は、利益の正当性を主張するための基本理念ともいえるものである。現代の経済史・経営史は古文書を読んで、歴史的な事実を解明するだけにとどまらない。歴史的な事実を踏まえて、現在および将来についても積極的に論じることも求められているのである。営利活動のなかに高い倫理性を生み出した近江商人の経営と理念を探求し、そうした事実とこ

れからの企業のあり方とを接合的に考察することが研究の目的である。

3. 研究の方法

「三方よし」の原典は、宝暦4(1754)年に書かれた、先述した近江商人中村治兵衛宗岸の「宗次郎幼主書置」であることはすでに拙稿(『同志社商学』50巻5・6号)において考証済みである。研究の方法としてはまず、他の近江商人諸家における純資産蓄積の過程と、どのような形で「三方よし」に通底するような理念がみられるのかという問題意識をもって、松居久左衛門家と野田六左衛門家の史料調査を開始した。松居家については、東近江市の近江商人博物館に現物史料が保管されていたので、まず史料整理から調査を開始した。江戸期から明治期にわたる150年間の松居家の勘定帳である「書出し帳」を分析して、純資産の推移を明らかにし、最盛期が三代目松居久左衛門遊見の時代であったことが判明した。また、遊見の事績を調べるために、同家の史料はもとより、その没後に刊行された資料を渉猟した。その結果、熱心な念仏信者であり同時に商い巧者であった遊見は、自家のみの繁栄を願ったのではなく、商機を他者と共有しようとする仏道への帰依からくる自利利他の考え方をもち、商界で奮起しようとする者に対して物心両面の援助を与えたことが判明した。それは、結果として、多くの後進の商人を育てることになり、地域社会への貢献につながった。

酒造業を主とする野田六左衛門家に関する調査は、野田家の出店のあった板鼻宿(安中市)への現地調査による聴き取りから始まった。次いで、野田家から史料の寄託を受けている滋賀県日野町の「日野町史編さん室」に通って、作成されていた目録にもとづいて、

必要史料の調査と解説を開始した。まず初代から七代までの系譜を明らかにした。純資産の趨勢は3期に分けて表示した。弘化3年(1846)の四代目の強制退隠の後を受けた後の五代目以降の野田家は、幕末維新期という変革期にもかかわらず、純資産を順調に伸ばしたことが分かった。さらにこの純資産の増加には二つの要因があったことを明らかにした。一つは五代目の娘による分家である野田東三郎家の設置である。これは優秀な婿養子を迎えることで経営陣の強化につながった。もう一つは幹部店員への大儀料名目での利益分配によって有能な店員を確保できたことである。

4. 研究成果

純資産の蓄積過程を中心とする経営分析と、経営を支えていた理念の両面から近江商人の経営を照射しようとする新しい視点を取り入れた松居久左衛門家と野田六左衛門家の史料分析を通じての研究成果として、次の事が明らかとなった。まず松居家と野田家の江戸期から明治期におよぶ純資産の長期的な推移が明らかになったことである。松居家では、三代目松居久左衛門遊見の時代が絶頂期であることを数量的に確認した。松居家が弘化頃に作成された近江商人の番付である「湖東中郡日野八幡在々持余家見立角力」において東横綱の地位を占めていることによって示された世評は、実際の蓄積過程と一致することを実証できた。野田家では五代目野田金平(後に六左衛門)の時代が最盛期であったことが明らかになった。最盛期をもたらした要因は遊見と五代目金平の業績は、それぞれ経営理念と密接な関連があった。遊見は、念仏信者としての信念からする自利利他の考え方を基本に持っていた。たとえば、生系の利益の見込みある時は、親族や隣家の

家々を回って遊金を集め、それで得た利益を出資額に応じて配当して、眠った資金を掘り起こしたり、元手金の不足に悩んだり商いに行き詰った後輩へ、資金を用立てたり、アドバイスを与えることによって地域振興に努めたという、具体的事例を発掘した。五代目野田金六については、明治11年の遺言を発見し、娘分家への利益分配率を明記して、分家当主の経営陣への確保によって家業の安泰を図る周到さを持ち合わせていた事実を明らかにした。また、「桐逸」という雅号を持って詩歌俳諧や墨絵に興味を持った文人的気質の五代目金六の、大店当主としての人となりも描き出した。

このような江戸時代から続く近江商人の経営と理念の研究は、CSRの日本的先駆形態として、日本の経営思想に含まれる普遍性と独自性を実証し、世界に向けて発信する意義のあることを訴えるものとなった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 末永國紀 近江商人野田六左衛門家の系譜と蓄積過程 (同志社大学『経済学論叢』62巻4号 査読無 2011年 pp.1-58)
- ② 末永國紀 近江商人松居久左衛門家の蓄積と理念 (同志社大学『経済学論叢』61巻3号 査読無 2010年 pp.1-38)
- ③ 末永國紀 近江商人小林吟右衛門家の経営書簡集(抄)十 (同志社大学『経済学論叢』60巻1号 査読無 2008年 pp.130-164)

[学会発表] (計1件)

- ① 末永國紀 「近江商人の経営と理念—事

業承継を中心に」 第12回事業承継研究会 平成21年11月5日 同志社大学

[図書] (計1件)

- ① 末永國紀 『日系カナダ移民の社会史—太平洋を渡った近江商人の末裔たち』ミネルヴァ書房 2010年 282ページ

6. 研究組織

(1)研究代表者

末永 國紀 (SUENAGA KUNITOSHI)
同志社大学・経済学部・教授
研究者番号：60065860

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし